

働き方が影を落とす自治会会長選び

おかの
岡野

さかえ
栄

連合・総合企画局長

自治会総会で会長に選ばれ数ヶ月が過ぎた。集合住宅に移り住んで30年以上になるが、役員経験は妻任せだったため一度もなかった。それがいきなり会長をやれということになった。その顛末記と感じたことを書こうと思う。

定年を間近に控え、これからは地域で暮らす、それにしても地域のことを何も知らない。丁度、役員当番、自治会でもと思ったのが発端である。

自治会の新旧役員合同会議の日、妻から「男の人は必ず会長をやらされる。籤になるまで頑張るように」とアドバイスを受けた。集会所に行くと既に新旧理事が揃っており、空いていた椅子に座るや否や、旧副会長（女性）から「会長、ご苦労様！」とカウンターパンチが飛んできた。妻のいう通りだと思いながら、「そういう考えは良くないんじゃないですか」とやんわり反論。雰囲気を感じた前会長（男性）が「新理事で担当をお決めください」と仲介し、旧理事は総会の準備の為に別室に移った。

自治会会員は約220世帯、理事は全員で9名、自分を除いて全員が女性である。その内5人は30代から40代、全員が働いている。3人は60歳前後、専業主婦である。どうやって役割分担を決めるのかなと思っているうちに、先生タイプの理事が、黒板に会長・副会長・事務局・会計・社体・福祉・文化・広報と役職を書き始めた。

すると、各理事が「担当をやります」と次々に発言。瞬く間に会長ポスト以外は埋まってしまった。「どなたか会長を」の問いに、「共稼ぎ」「子供が病気」「老親介護」「パソコンが苦手」「挨拶が苦手」等々、できない理由が述べられていく。「あみだ籤で決めませんか」と最初の提案するも応答なし。何とも言えないプレッシャーとばつの悪い沈黙が始まった。先生タイプの理事など、会長に相応しいのにと思いながらじっと待つ。しかし、誰も下を向いたまま沈黙だけが続く。「公平なあみだで決めましょう」と再提案したが応答なし。会議がはじまってから2時間近くが過ぎた。このままではラチがあかないと思い「無理な人が籤に当たったら自分が引き受けます」といった瞬間、「そこまで言ってくれるのならあみだ籤は無しにしてください」「バックアップします」と異口同音に口が開いた。「わかりました」と一言。誰も貧乏くじは引きたくなかったのだと思う。また、会長は外部会議の出席が求められ、会長会など男性が占めていることも一因にあるらしい。これが会長選びの顛末記だ。働く女性の立場からすれば、家庭も仕事も地域もでは目一杯だと思う。男性が必ず会長というのもきついが、背景にバランスを欠いた働き方が大きく影を落としていることは間違いない。